

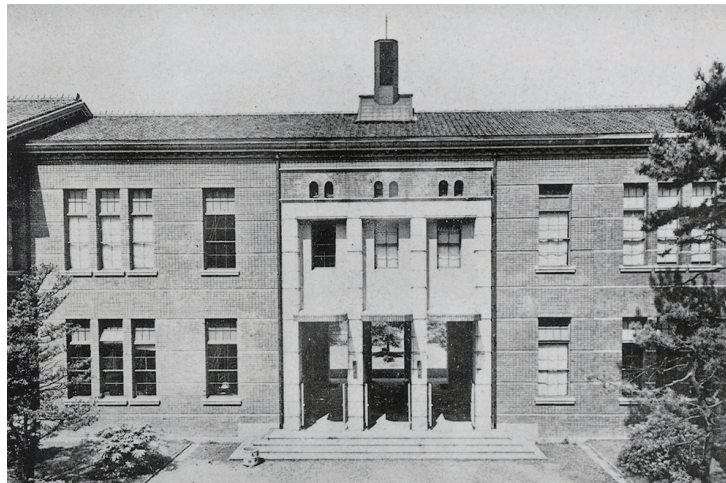
京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第44号

目次

有賀鐵太郎による〈基督教学〉の始まり —有賀鐵太郎関係資料より— 小柳 敦史…………… 2	大学文書館の動き：…………… 7 『西田幾多郎関係資料』、『河上肇関係資料』 を公開しました 閲覧室、事務室が移転しました
大学アーカイブズにおける 電子文書の長期保存 橋本 陽…………… 4	人の動き…………… 7
日誌…………… 6	京都学派の学位論文 渡辺 恭彦…………… 8



文学部中央教室正面
(1943年)



卒業式当日の懇親会
(1957年、文学部中央館中庭)



文学部哲学科書庫
(年代不明)

1919年2月、文科大学は京都帝国大学文学部と改称された。講座も増置され、1922年5月には宗教学第二講座として基督教学講座が設置された（関連記事2～3頁）。1923年、施設の狭隘化に対応するために、文学部中央館（鉄筋コンクリート造り2階建て、武田五一・永瀬狂三設計）が新築され、哲学科・文学科の研究室や書庫・閲覧室にあてられた。哲学科に属する基督教学講座の研究・教育活動もそこで行われた。

有賀鐵太郎による〈基督教学〉の始まり —有賀鐵太郎関係資料より—

北海学園大学人文学部准教授 小柳 敦史

京都大学文学部のキリスト教学専修は、1922年に京都帝国大学文学部に「宗教学第二講座」として設置されてから2022年で百年を迎えた。この歴史の中で、「キリスト教学」という学問の展開にとってとりわけ大きな役割を果たしたのが、基督教学講座の第二代教授を務めた有賀鐵太郎（1899-1977）であった（現在は「キリスト教学専修」とカタカナで表記するが、有賀の在任時は「基督教学講座」と漢字で表記されていたので、本稿でも以下では漢字表記とする）。

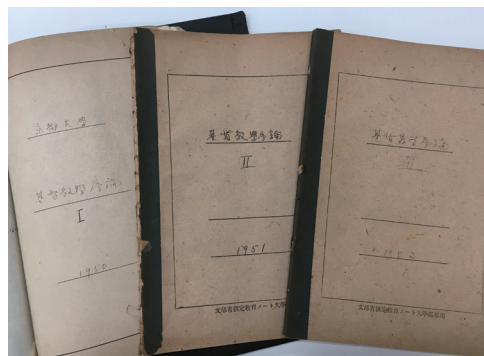
京都大学大学文書館には、有賀鐵太郎関係資料が収蔵されている。これは、有賀のご遺族から、2002年頃より数回に分けて文書館に寄贈されたものである。段ボール34箱と4段キャビネット一つに収められた、著作の草稿と原稿、学生時代のノート、教員となつてからの講義ノート、教会での説教のための原稿、日記、書簡と葉書、大学での業務・学協会での活動・国際会議（第二バチカン公会議を含む）などに関する大量の書類を含むこの資料は、有賀の人生と学問について、そしてさらには有賀が生きた時代についての貴重な情報を含んでいる。本資料はまだ整理中であるため一般公開はされていないが、有賀が京都大学に着任するまでの基督教学講座の沿革と有賀の人生について確認しながら、この資料の意義を考えてみたい。

基督教学講座が生まれる発端となったのは、銀行家で東京・富士見町教会の教会員だった渡辺荘が、官立大学でキリスト教を研究するための資金提供を思い立ち、義理の息子でありキリスト教史研究者であった石原謙を通じて、1918年に、その前年に京都帝国大学に赴任していた波多野精一に研究資金の提供を申し出たことであった。この話を受けて波多野が同僚の西田幾多郎に相談したとこ



有賀鐵太郎
(1959年撮影:有賀誠一氏提供)

ろ、西田が、それならいっそのこと「キリスト教講座を作ってもよい」とさらなる提案を返したことで、講座設立に向けた動きが始まった（石原謙「波多野先生の横顔」『波多野精一全集 月報六』、岩波書店、1969、5頁）。その後、関係者や大学当局での準備が進められ、1922年5月に「基督教学及教理史」のための「宗教学第二講座」設置が発令される。ただし、この時点では独立した講座を運営する資金が十分でなかったため、宗教学第一講座担任教授の波多野による兼任講座であった。基督教学講座は1937年にやっと独立した講座となり、定年退官まで数ヶ月であった波多野を担任に迎えた。波多野退官後は、松村克己が講師および助教授として授業を担当し、ゆくゆくは担任教授となると目されていた。しかし、松村は敗戦後の適格審査により不適格との判定を受けて退職する。そこで文学部教授会が基督教学講座の担任教授として招聘したのが、有賀鐵太郎だった。

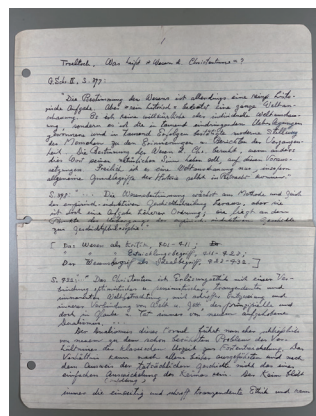


「基督教学序論」講義ノート（全3冊）

有賀鐵太郎は大阪に生まれ、東京で育った。東京府立第一中学校に通い、在学中に原宿同胞教会で洗礼を受けている。一中卒業後、同志社大学文学部神学科で学ぶ。シュライアマーの宗教本質論についての卒業論文を提出して学部を卒業した1922年からニューヨークのユニオン神学校に留学、修士号を得た。修士論文のテーマはトレルチの宗教本質論であった。帰国した翌年の1926年には同志社大学文学部神学科講師に就任、1930年に教授に昇格した。1935年には再びユニオン神学校に留学し、神学博士の学位を受けた。こ

の時の研究テーマは、古代ギリシアの教父であるオリゲネスであった。同志社の学部時代や二度にわたるユニオン神学校の留学時代のノートやレポート類、あるいは若き講師として母校で教鞭をとった時代の講義ノートも有賀鐵太郎関係資料に含まれている。こうした資料を丹念に読み解けば、有賀鐵太郎の学問形成の過程を辿ることができるだろう。

1943年に有賀は同志社大学文学部神学科の主任となり、戦時下にあつてキリスト教が「敵国の宗教」と見なされていた状況下で神学科を守ることに尽力した。有賀自身も、アメリカ社会と結びつきの強い知識人として特高の監視下に置かれた。しかし、戦争の終結により、有賀を取り巻く状況は一変する。英語の堪能なキリスト教研究者として、GHQの文官や従軍チャプレンと交友を結び、アメリカ的民主主義を戦後の日本社会に伝える役割を担った。特に親しい仲であった、かつてはイェール大学で英文学やフランス文学を学んでいたシーフェリンという人物の講演記録の翻訳出版も手がけている(ジョン・ジェー・シーフェリン『民主主義の根柢としての基督教』全国書房、1946)。さらに、シーフェリンからの提案により、有賀が匿名で民主主義的な内容を持つ新たな教育勅語の草案を執筆したことが知られている。



トレルチ「〈キリスト教の本質〉とは何のことか」抜書き(一部)

同志社大学文学部神学科の置かれた状況も好転する。1947年7月に旧制の大学令のもとで神学部が設立され、有賀はその初代学部長となった。その矢先に、京都帝国大学からの招聘があったのである(着任時には京都大学となっていた)。京都大学の側からすれば、古代教父から近代神学までカバーする学識と優れた語学力に裏打ちされた堅実な研究能力に加え、近代民主主義に深い理解のある有賀は、基督教学講座の再出発を託すのに最もふさわしい人物であったに違いない。有賀の京都大学招聘については未解明の点も多い。有賀鐵太郎関係資料に加え、京都大学および同志社大学関係者の資料に基づくさらなる研究が待たれる。

当初は同志社大学神学部への責任から異動の打診を固辞していた有賀だが、最終的に京都大学の招聘に応じて1948年10月に基督教学講座の担任教授として着任し、研究と教育に従事する。ここで特筆すべきは、1950年から「基督教学序論」という講義が開始されたことである。講座設立者の波多野は「基督教学」と「神学」を互換可能な言葉として用いていた。また、波多野も松村も各論的な講義は行ってきたが、「基督教学」とは何かを講じることはなかった。有賀によって初めて、「基督教学」が、独自の対象・方法・課題をもつ一つの学問として反省的に考察されることとなったのである。「基督教学」という学問について考えるための重要な資料である「基督教学序論」の講義ノート(全3冊)も、有賀鐵太郎関係資料に含まれている。ノートは万年筆で丁寧に記されており、ところどころ鉛筆の書き込みが認められる。おそらく、講義中に書き加えられたものだろう。

ここで、「基督教学序論」講義ノートを調査の際に得た、ささやかな感動について記すことをお許しいただきたい。講義ノート第1巻を開くと、表紙の下に、トレルチの論考「〈キリスト教の本質〉とは何のことか」(“Was heißt »Wesen des Christentums«?”)のドイツ語原文からの手書きの抜書きと、その日本語訳の複写が挟み込まれているのに気がついた。このテキストは、「キリスト教の本質」という概念の多層性を論じた方法論的な文献である。おそらくこれは、受講生に配られた資料なのではないだろうか。私はキリスト教学研究室で学び、トレルチを現在に至るまで主たる研究対象としてきた。そのような私にとって、自分が身を置いてきた学問伝統の源で、自分が長年取り組んできた思想家の発想に出会い直したことは、感動的な発見だった。

私は「基督教学」への関心からこのような出会いを果たしたが、有賀鐵太郎関係資料は実にさまざまな出会いの可能性を秘めている。2027年の没後50年に向けて、資料の整理と調査が進むことを期待したい。

[参考文献]

小柳敦史「戦後京都大学の基督教学講座—有賀鐵太郎による二度目の誕生—」『現代日本の大学と宗教』(法蔵館、2022) 281-310頁。

有賀誠一「父、有賀鐵太郎への想い」『基督教学研究』第38号(京都大学基督教学会、2019) 71-92頁。

大学アーカイブズにおける電子文書の長期保存

京都大学大学文書館助教 橋本 陽

はじめに

近年、日本ではデジタル・トランスフォーメーション (Digital Transformation、DX) 事業が盛んである。国立大学法人も例外ではなく、電子化による業務の効率化が試みられ、その中には文書業務も含まれる。したがって、将来的には、歴史公文書等と評価された電子文書が大学アーカイブズに移管されることになる。この問題について、本稿では、大学アーカイブズが講じるべき対策の大筋を示すこととしたい。典拠としたのは、世界各国の専門家が集い電子文書の長期保存を研究するインターパレス・プロジェクト (InterPARES Project) と国際アーカイブズ評議会 (International Council on Archives、ICA) が共同で作成した『電子記録の道: 電子保存の諸論題 (Digital Records Pathways: Topics in Digital Preservation)』 (<http://www.ica-sae.org>) である。

大学における文書の電子化は、学内の運営業務システムである教職員ポータル内に設けられた文書決裁のワークフローやファイル管理の機能を活用すれば事足りると考えられるかもしれない。例えば、ワークフローで決裁を経た文書を、変更が難しく可読性も保証される PDF/A フォーマットにし、ファイル管理の機能で保管するというやり方が挙げられる。また、ポータルを使わず、各部署の共有ドライブで保管できるとする考えもあるだろう。しかし、通常、その PDF/A 文書には自署などの筆跡はなく、文書からだけでは誰が作成の責任者なのかは不明である。さらに、PDF/A への転換の方法次第では、転換以前の Word や Excel などでの作成日時が残らず、転換した日時のみしかわからないままになる。PDF/A であっても、作成の責任者や日時が確定できないのであれば、その文書に証拠としての信用価値があるとみなすことはできない。

どのような状態であれば信用価値のある記録と評価できるかについて、『電子記録の道』が説明している。まず、『電子記録の道』は、ドキュメント (Document) を、記載内容が固定され、表示形式が定まった範囲以上は変更されない情報であると定義している。さらに、レコード (Record) は、ドキュメントの一種であり、一つの業務活動の中で、その手段または副産物として作成または受領され、後の活動や参照のために置き置かれたものと定義される。置き置くという行為の代表的な事例はファイルに綴じるというもので、このときにドキュメントは、同じ業務活動の中で授受された他の諸々のレコードと関連づけられ、新たなレコードとなるのである。また、種々のファイルが形成するレコードの分類体系は、組織内の各部署が受け持つ機能分析から導き出される業務の樹形図と一致させることが望まれる。

レコードの信用価値

レコードに信用価値があると判断されるには、正確性 (Accuracy)、信頼性 (Reliability)、真正性 (Authenticity) という3つの特性を持つことが前提となる。

正確性とは、内容の精密性であり、特に電子文書においては、その内部にあるデータが信頼できるかまたは完全であるかによって評価される。データ単位での評価が必要となるのは、電子空間では、電子文書の移動や時間の経過によってデータの変容が容易に起こりうるためである。移動で生じる変容とは、個人間や他のシステム間とのやりとりで起こりうるデータの脱落などをいう。時間の経過で起こる変容は、文書を保管するシステムのアップグレードや、文書を古いシステムから新しいものに移行する際に生じるものを指す。

信頼性とは、内容に関してレコードを事実の声明として信用できるかを示す価値を指

す。記載すべき要素がレコードの中に書き込まれているか、そして業務や活動を遂行するのに伴うレコード作成の手續きに準拠して作成過程が管理されているかどうかによって評価できる。

真正性とは、レコードをレコードとして信用できるかを示す価値であり、同一性と完全性という2つの特性から成り立つ。同一性とは、そのレコードと他のあらゆるレコードが異なることを示す様々な特質から構成される。つまり、同一性によって、他の文書と差し替えが不可能であることが示される。完全性は、レコードが改ざんされていないかどうかを示す特性であり、作成されて以降の保管状況から判断される。これを示すのに必須となる要素が保管の連鎖という概念である。保管の連鎖とは、正当な権限を有すると認められる主体が連鎖とレコードの適切な保管を継続していく状態を指す。

旧来の紙であれば、歴史学や古文書学の分析によって、文書そのものから信頼性と真正性を評価できたのに対し、電子文書ではメタデータが不可欠の要素となる。メタデータとは、電子文書の特質を説明するデータである。信用価値を示すメタデータの一部として、レコードの作成者・起草者・受領者・担当部署、発行・作成・送付の時刻、取り置かれるレコードの分類体系、電子ファイルのフォーマット、作成後の保管を担当する個人または部署、アーカイブズへの移管または廃棄の日程などが挙げられる。

信用価値を形成し維持するシステム

文書管理が進んだ海外では、大学においても、ISO 15489 という国際標準に準拠した電子ドキュメントおよびレコード管理システム (Electronic Document and Record Management System、EDRMS) が使用されている。地域によっては、DoD 5015.2 (アメリカ) や MoReq (ヨーロッパ) といったシステム設計の仕様までが定められている。EDRMS は、ドキュメントとレコードによってサイトが分けられている。ドキュメント管理のサイトは、文書決裁のワークフローやドキュメントの保管を担当する。一方で、レコード管理のサイトでは、分類体系にドキュメ

ントを取り置き、さらには適切なメタデータを付与し、ドキュメントをレコードとする。レコードになると、文書管理の専門職であるレコード・マネージャーなど限られた担当者以外は、PDF/A などフォーマットに限らず、閲覧はできても内容の変更は許されない。このような機能を持つ EDRMS によって、レコードの信用価値が作られ維持されていくのである。

歴史的な価値のあるレコードは EDRMS からアーカイブズの管理する長期保存システムへ移管されることになる。レコードの信用価値を保護し続けるためには、そのシステムが ISO 14721 として認められる OAIS 参照モデル (Reference Model for an Open Archival Information System) に準拠していなければならない。この移管時に、例えば Word などの文書フォーマットは PDF/A に転換することもできるし、転換された情報もメタデータに追加される。文書閲覧者の立場からは、そういったメタデータにアクセスすることで、文書に信用価値があることを確認できる。

以上の枠組みを大学の法人文書のケースに大雑把に当てはめれば、次のような道筋をたどるだろう。まずは、EDRMS におけるドキュメント管理のサイトで教職員が各自業務を進めながら事務文書を作成・受領する。そこから、組織共用性を備えるべき一連の文書をレコード管理のサイトに移送し、業務分析から導き出される分類体系の中に位置付けられた法人文書ファイルに取り込むとともにメタデータを付与し、レコードとして確定する。分類枠組みの中でも同じ業務に関する法人文書ファイルの集合体をシリーズと捉え、シリーズ単位で保存年限を設定し、期限が来れば、廃棄するシリーズ以外を大学アーカイブズが管理する長期保存システムに移管する。長期保存システムでは、電子文書のフォーマット転換やメタデータの追記などで信用価値を維持するほか、検索システムにより利用者の要望に応じていく。このような流れを実現できるシステムを構築すれば、教職員が利用する現用段階やアーカイブズが保存する非現用段階の双方において、業務や行為の説明責任を果たし続けることのできる法人文書を保有し、閲覧希望者に提供できるはずである。

[日誌] (2022年10月～2023年3月)

2022年

- 10/ 3 総合博物館特別展「創造と越境の125年」に所蔵資料貸出。
- 10/ 5 企画展「京大の周年記念行事－史料でたどるお祝いの歴史－」開催（～12月4日）。
- 10/ 5 西山教授、新採用職員研修において「京都大学の歴史」「なぜ文書を作る？－公文書管理法と私たち－」と題して講義。
- 10/12 京都新聞より、京大における紛争の様子を撮影した写真十数枚について、その内容・価値などについて取材。
- 10/13 学内図書室より、資料の整理方法（寄贈受け入れ、目録作成、公開）を検討するため文書館書庫を見学。
- 10/13 学内より、医学部衛生学教室の戸田正三によるスペイン風邪感染者予想グラフについて、資料の所在の照会。
- 10/14 学内より、第17回京都大学ホームカミングデー特設サイトに掲載する写真データの照会。
- 10/19 学外より、京大におけるアッシリア学（シュメール学）創始を研究するため、オックスフォード大学教授セイスに関する資料について照会。
- 10/19 大学文書館教員会議。
- 10/21 西山、講演会早稲田大学創立150周年に向けて－『早稲田大学百五十年史』第1巻刊行記念（於早稲田大学）において「頼りにされる大学沿革史」へ－『早稲田大学百五十年史』を読んで」と題して講演。
- 10/25 照沼康孝氏より、神前熙氏の「第三高等学校関係写真」寄贈。
- 10/25 近藤隆氏より、「大学紛争関係写真」寄贈。
- 10/27 学外より、教員データベースの鈴木正の死去年月日について、記載されている1931/4/1ではなく、1934/4/1が正しいのではないかとの指摘。
- 10/31 荘村正夫旧蔵資料公開。
- 10/31 『京都大学大学文書館だより』第43号刊行。
- 11/ 4 静岡文化芸術大学図書館・情報センターより、アーカイブズセンター創設に向けた情報収集のため館内見学。
- 11/ 8 時事通信社より、京大紛争関連写真に関する記事（11月8日京都新聞朝刊）について照会。
- 11/ 9 橋本助教、国文学研究資料館主催アーカイブズ・カレッジで「アーカイブズと情報コントロール」を講義。
- 11/12 西山、岡松参太郎生誕150年記念国際シンポジウム「東アジアにおける植民地法制と学知」（於早稲田大学）において「創立期京都帝国大学と岡松参太郎」と題して報告。
- 11/13 西山、京都モダン建築祭スペシャルイベント百年時計台記念館見学ツアーにおいて、歴史展示室・迎賓室・吉田キャンパスを案内。
- 11/15 西山・渡辺助教、清水勝氏宅で資料調査。
- 11/16 京都大学新聞社より、京大新聞検索システム作成のため当館の検索システムについて照会。

- 11/17 水垣勝氏より、三高自由寮アルバム等寄贈。
- 11/17 愛媛県生涯学習センターに三高資料5点を展示のため貸出。
- 11/30 大学文書館教員会議。
- 12/ 2 学外より、京大生協75周年（2024年）にあたり関連資料の所在について照会。
- 12/14 学外より、矢野仁一資料について照会。
- 12/19 学外より、第三高等学校が京都大学になった年について照会。
- 12/22 大学文書館教員会議。

2023年

- 1/24 大学文書館教員会議。
- 1/27 元教員より、医学部教員だった戸田正三が1917年に留学先の欧米から家族に送った書類等の寄贈について照会。
- 2/ 8 京都新聞より、1953年に「わだつみ像」が立命館に設置されるに先立ち、京大に設置する話があったことについて事実関係の照会。
- 2/ 9 橋本、国立公文書館主催アーカイブズ研修IIで「電子公文書の保存・利用－基本的考え方－」を講義。
- 2/10 学内より、農学部百年史執筆のため農学部創設関係書類や演習林関係資料等について照会。
- 2/13 総務部総務課とともに情報学研究科・エネルギー科学研究科・本部構内（理系）共通事務部を対象に法人文書監査実施。
- 2/17 橋本、全史料協近畿部会第163回例会「アーカイブズ学における基礎概念の再検討」（於キャンパスプラザ京都）において、「フォンド尊重」と題して研究発表。
- 2/17 大学文書館運営協議会。
- 2/18 立教大学共生社会研究センター、埼玉県立文書館、東京大学文書館より、書庫見学。
- 3/ 2 学外より、本部構内にある織田万の胸像台座裏の碑文に関する資料について照会。
- 3/ 3 事務室・閲覧室・会議室・教授室、2階に移転。
- 3/ 3 学外より、旧制第三高等学校野球部の一高との野球戦について照会。
- 3/ 7 企画展「1969年再考」開催（～6月4日）。
- 3/15 大学文書館教員会議。
- 3/20 『京都大学大学文書館研究紀要』第21号刊行。
- 3/24 松浦陽子氏より、故松浦菊男氏旧蔵三高同窓会関係の幔幕等、寄贈。
- 3/28 京都新聞より、学徒出陣について取材。
- 3/28 学外より、七三一部隊関連の資料について照会。
- 3/30 劇団京大創造座関係資料（追加分）を公開。
- 3/30 河上肇関係資料を公開。
- 3/30 西田幾多郎関係資料を公開。
- 3/31 京都新聞より、企画展「1969年再考」について取材。
- 3/31 事務補佐員竹内里香退職。

大学文書館の動き

『西田幾多郎関係資料』、『河上肇関係資料』を公開しました



大学文書館では、2023年3月30日より『西田幾多郎関係資料』、『河上肇関係資料』を公開しています。いずれも遺墨が大半を占めており、所蔵資料のなかでも珍しいものです。

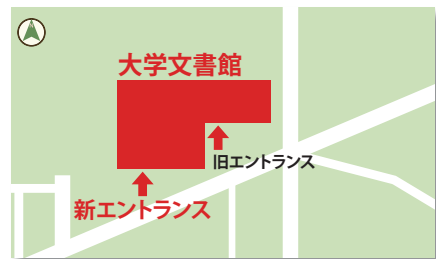
西田幾多郎関係資料126点のほとんどすべてが西田幾多郎（1870～1945）の手になるもので、漢詩を典拠とした書のほか、「来日春光佳 去時秋色爽 湘山与湘水 歳々幾来往」（右）などの自作詩も含まれています。「悠遠」（中央）は、西田の造語で茶の精神を表すものとされます。こういった揮毫については、門下生が西田の人物像や思索と重ね合わせてふり返っています。1928年頃から始められ、多い時には1日7,80枚書いたようです。当館資料にある一書「一日不作一日不食」は、唐の禅僧である百丈懐海の教えです。西田が好んでこの言葉を書いたのは、自己激励のためであったと見なされています。

河上肇関係資料304点は、1915年頃から1940年頃の間、経済学者河上肇（1879～1946）が書いたもののほか、書画家津田青楓、文学部教授狩野直喜、経済学部教授河田嗣郎等、知人による書で大半が構成されています。左傾教授として名指しされた河上は、大学から求められ1928年4月18日に京都帝大経済学部を辞職することになりました。1929年12月31日に書かれた「学問にとりて平安の大道は無い…」や「闘争か然らずんば死か…」などの書からは、河上が味わった苦渋がにじみ出るかのようです（左側の3点）。河上が書き残した前者の書は、マルクスが『資本論』フランス語版の発行出版者モーリス・ラシャトルに寄せた言葉です。

筆跡からは、学術論文等からは知ることのできないものを感じ取ることができます。

閲覧室、事務室が移転しました

2023年3月に当館施設の一部（閲覧室、会議室、教授室、事務室、書庫の一部）が大学文書館の建物内で移転しました。また、当館出入口と駐輪スペースも同じ敷地内の南西側に変更されました。御来館の際には、南西側自動ドアの横にあるインターホンでお呼び出し下さい。閲覧室、事務室は2階にあります。



人の動き（2022年10月～2023年3月）

2023年3月31日 川口朋子、大学文書館助教を退任。

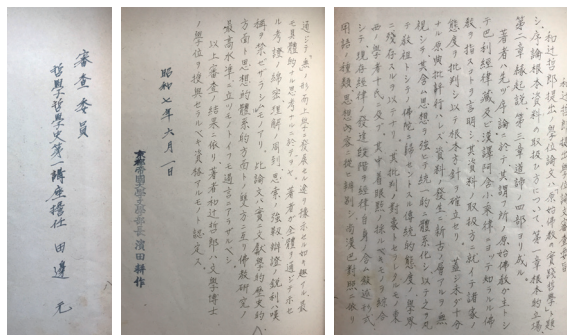
京都学派の学位論文

京都大学大学文書館助教 渡辺 恭彦

大学文書館で数多く所蔵している資料に、学位に関する書類がある。試みに、京都学派に關係する学位論文を見てみよう。文学部の学位論文關係書類を繙いてみると、1918年7月8日に学位を授与された田邊元を皮切りに、後に京都学派を形づくっていくことになる面々が次々と学位を申請しており目を瞠る(表参照)。いずれも、前人未踏の域へと到らんとするもので、一世紀後の今もなお研究対象として読まれている論文である。

たとえば、田邊の「数理哲学研究」は、日本における科学哲学の分野を切り拓いていくことになる。審査には西田幾多郎も加わっていたはずで、学位授与という制度を抜きにしても、どのような議論が交わされたのか興味をかきたてられずにはおれない。その後、1928年に退官した西田のあとを受けて、田邊は1945年3月に退官するまで主たる審査委員として多くの哲学論文の審査にあたった。多岐にわたる申請論文を審査した当時の文学部教官が学术界に冠絶していたことを伺い知ることができよう。

この時期、審査委員は3人から5人で構成され、申請から授与まで長い場合は3年ほどかかっている。その中で目を引くのは、和辻哲郎の学位請求論文「原始仏教の実践哲学」(1929年9月13日申請、1932年7月15日学位授与)を審査したのが田邊ひとりであったことである。この審査は異様に映るが、いきさつを書類から知ることはできない。もっとも、1926年12月に刊行した書籍で波多野精一と田邊から激励と助言を受けたことについ



和辻哲郎の学位審査要旨

て謝辞を述べており、15ページに及ぶ要旨では、従来の初期仏教解釈における資料の取扱いに批判を加え、原始仏教を一つの発展体系と解するものと和辻の方法論が概括された。「スカル方法論上ノ新見地ハ宇井氏ワレーザ氏ノ如キ一ノ先蹤アリトイヘドモ、著者ハ更ニ其西洋哲学ニ対スル十分ナル知識ト明晰透徹ナル思索カトニ依リ之ヲ徹底シ、容易ニ其比ヲ見得ザル如キ整然タル秩序ヲ原始仏教ノ体系ニ賦与スルコトヲ得タルナリ。コレハ画期的ナル著者ノ功績ニシテ、仏教ノ研究ニ対シ特別ノ使命ヲ負フ我が学界ノ為メニ重キヲ加フルモノトイハザルベカラズ。」(『学位論文關係書類(6)自昭和二年 至昭和七年』識別番号02B09478)このように、西洋哲学の素養に基づいて原始仏教を対象とした学位論文は、文献学的歴史的方面と思想的体系的方面の双方にわたって仏教研究の最高水準に立つものと評された。制度が変わり、当時と今とで学位の意味合いは大きく異なる。それでもなお、学位審査は、請求する側にとって矜持を賭けた機会である。審査する側にとっても学問的力量が試される、まさに真剣勝負の場といえよう。

京都学派に關係する学位

申請者	論文題目	審査委員	申請日	授与日
田邊元	「数理哲学研究」			1918/ 7/ 8
山内得立	「認識の存在論的基礎」	哲学哲学史第一講座担任 田邊元(審査委員長)、哲学哲学史第四講座担任 朝永三十郎、宗教学第一講座担任・宗教学第二講座担任 波多野精一、倫理学講座担任・社会学講座担任 藤井健治郎、心理学講座担任 野上俊夫	1928/ 6/ 15	1930/ 4/ 18
天野貞祐	主論文「『純粹理性批判』の形而上学的性格」 参考論文「『純粹理性批判』第一版第二版論」	朝永三十郎、田邊元、教育学教授法講座担任 小西重直	1931/ 1/ 21	1931/ 6/ 8
和辻哲郎	「原始仏教の実践哲学」	田邊元	1929/ 9/ 13	1932/ 7/ 15
九鬼周造	「偶然性」	田邊元、心理学講座担任・社会学講座担任 野上俊夫、波多野精一	1931/ 1/ 21	1932/ 11/ 10
木村素衛	「実践的存在の基礎構造—教育哲学の考察に向けられたるフィヒテ哲学の一つの研究—」	田邊元、倫理学講座担任天野貞祐、野上俊夫	1937/ 11/ 2	1940/ 3/ 15
高坂正顕	「歴史的世界 現象学的試論」	田邊元、山内得立、哲学哲学史第四講座担任九鬼周造	1937/ 10/ 27	1940/ 3/ 13
三宅剛一	「学の形成と自然的世界」	哲学哲学史第五講座担任山内得立、田邊元、天野貞祐	1940/ 12/ 6	1943/ 7/ 24
西谷啓治	主論文「宗教哲学」参考論文「神秘思想史」	田邊元、天野貞祐、宗教学第三講座担任 羽了了諦	1942/ 3/ 1	1945/ 9/ 30
高山岩男	主論文「哲学的人間学」参考論文「世界史の哲学」	田邊元、哲学哲学史第五講座担任山内得立、天野貞祐	1943/ 6/ 5	1945/ 11/ 15
下村寅太郎	主論文「無限論の形成と構造」参考論文「科学史の哲学」	田邊元、山内得立、木村素衛	1943/ 10/ 15	1945/ 11/ 27
田中美知太郎	主論文「ロゴスとイデア」参考論文「ソフィスト」	山内得立、史学地理学第一講座担任 原隨園、倫理学講座担任 島芳夫	1949/ 2/ 4	1950/ 4/ 12